

<召天者記念礼拝>

*古河教会設立以来 64 年が経った。この間教会員になられた方は 300 名以上。そのご家族の方を含めて実に多くの方々が大きな神の家族の輪を作り、神様の祝福を受けて今日まで来ることができた。感謝にたえない。私たちの信仰の先輩たちの生き方を詩篇 16 篇から学ぶ。

*主を第一として生きた。

「**私**はいつも**私**の前に**主**を置いた。」(詩篇 16：8) すなわち主（神様）を第一に生きた。それは、自分第一ではないということ。先ず、人間が造った、見える偽物の神様から決別することである。そして自分の欲に従って生きることをやめることである。次に神様のことを聖書からよく知ること。そのうえでよく祈って神様ならどう思われるか、どう判断されるかの答えをいただいた上で行動することが必要である。

「**主**が**私**の**右**におられる」。「右」は力や守りをあらわすので、神様がいつも助けてくださる、主は 100 パーセント頼りになる方である。確信をもつことができるので私の心は揺るがない、と詩篇の作者は告白する。

*私のたましいは死の後も生き続けることを信じて生きた。

「**まこと**に、**あなた**は、**私**の**たましい**を**よみ**に捨て**お**かず、**あなた**の**聖徒**に**墓**の**穴**を**お見せ**には**なり**ませ**ん**。」(詩 16：10) 死んだら誰でも行くところを「よみ」と呼んでいた。そこに、神様は放って置かれることはない。主イエス信じる者「聖徒」は魂が死ぬことがなく、永遠に主と生きるのである。使徒ペテロは、「使徒の働き」の中で、詩篇のこの箇所はイエス・キリストのよみがえりの預言であると解釈した。イエス・キリストは死に打ち勝つ力を持った方であり、この方を信じる者は誰でもよみがえりのいのちを与えられている。

*「いのちの道」は喜びと楽しみの道であることを実感して生きた。

神と共に生きる者は常に神とつながっていて、神との交わりが切れない。だから、私たちは死さえ恐れなくてよい。先に天に召された方の中には、その人生の中で大変苦しい思いや、痛い、悲しい目にあった方もおられた。しかし、神様は一人ひとりの人生を、愛をもって見守ってくださった。主の愛の中に生きた者は、結局のところ喜びになるのである。神のいのちは永遠のいのちであり、信じた時からそれをいただいた私たちは、永遠にそれが続くことを確信すれば、まことに希望に満ちた人生を送ることができるのである。